

# フィールドスタディー成果レポート

2017 年 6 月 12 日

学籍番号：1A115227

氏名：堀内 香子

留学先大学：マラヤ大学

調査テーマ：「マレーシアにおける LGBT の顕在性」

昨今、LGBT と呼ばれるセクシュアル・マイノリティへの注目が様々な角度から高まっている。LGBT とは、レズビアン（女性同性愛者）・ゲイ（男性同性愛者）・バイセクシュアル（両性愛者）・トランスジェンダー（性同一性障がい等）の頭文字をとった単語で、性的少数者の総称の 1 つであり、日本では 13 人に 1 人が LGBT 層に該当するという調査結果も発表されている（2015, 電通ダイバーシティ・ラボ）。

そこで、この度のマレーシア留学期間中に、「マレーシアにおける LGBT の顕在性（Salience of LGBT in Malaysia）」という調査テーマの元、主にインタビュー・参与観察・ウェブニュースの記事分析という 3 種類の調査方法を用いてアプローチを行った。この調査は、マレーシアにおいて、LGBT の人々が現実世界とメディアでそれぞれどのように表象されているのか・扱われているのか明らかにすることを目的とした。また、その違いや特徴等を調査することで見えてくる「マレーシアの LGBT 事情」を通して、マレーシアという国に内在する問題を確認することができるのではという考察の元に調査をスタートさせた。

調査方法一つ目の「インタビュー」としては、そのバックグラウンドからマレーシアの LGBT に関して興味深い意見をお持ちであろう二人、一人はトランスジェンダーの女性 A、もう一人は「The Star」という新聞社の記者・プロデューサーであった女性 B、に話を聴くことが出来た。二つ目の「参与観察」としては、マレーシアに住む LGBT の人々の権利を主張している NPO「PELANGI」主催の「Queering the Nation: Talking on LGBTQ Rights in Malaysia?」というフォーラムに参加し、実際にたくさんの LGBTQ の参加者と共に 4 人のゲストスピーカーの話を聴くことが出来た。三つ目の「ウェブニュースの記事分析」としては、マレーシアのウェブニュースサイト「The Star」にて検索ワード「LGBT」でヒットした 2016 年前期（1 月～6 月）の計 73 の記事を、「そのニュースの被報道国がマレーシア（Malay）かそれ以外（World）か」・「その記事内容が LGBT の権利やその保護・推進に対し肯定的（ポジティブ）か否定的（ネガティブ）か」という 2 つの視点で分析を行った（ポジティブともネガティブともとれない事実の提示や検索からヒットはしたものの LGBT とはほぼ無関係であった記事等は「どちらとも言えない」にカウントした）。

調査結果として、最初に特筆すべきことは、トランスジェンダーの女性 A がインタビューで強調しておっしゃった「性別や LGBTQ かどうか等はその人の特徴のほんの 1 つに過ぎない」・「その人は、その人という『個人』である」ということだ。世間で彼らに対する差別や偏見・人権の問題について話し合われる必要性があるのはもちろんなのだが、その一方で、彼らの生活は Non-LGBTQ とほぼ同様に営まれており、LGBTQ であることは大して特別なことではなく、彼らをまるで違う生き物のように捉えることは誤りであるとここで指摘しておきたい。次に、女性 B とのインタビューから、イスラム国家であるマレーシアでは独裁的な政府とメディアが強くコネクションを持っており、政府にとって不利な報道はできず、イスラムの立場から許容し難い LGBTQ の人々に関するポジティブなニュースは積極的に報道されなかったり、言い方を変えて取り上げられる等の工夫がなされたりすることがわかった。

参与観察では、発展途上であり国教をイスラムとしているマレーシアではモダン化・ナショナルアイデンティティ確立のため、常に法律の改正や追加をコーランに基づき行っており、首相や時の移り変わりによって LGBT に対する考え方や認識も大きな変化を遂げてきたことが明らかになった。例えば、1985 年までマレーシアのトランスジェンダーはモニターのみされていたのだが、1985 年以降イスラムの専門家たちが決める、いわば「現代の様々な物事に対するイスラム的解釈（Fatwa）」において、「トランスジェンダーをハラム（禁忌）」とし、1999 年にはアイデンティティカード上の性転換が禁止された。現状として、マレーシアの法律や LGBT の受け止められ方は、彼らにとって非常に厳しいものとなっている。

ウェブニュースの記事分析では、「LGBT」でヒットした対象の73の記事のうち、マレーシア以外のLGBTについての記事は51あるのに対し、マレーシア国内のLGBTについての記事は10にとどまり、その報道された内容としては全体の34%がネガティブな内容であった（表1・

図1参照）。最近の日本では、公にLGBTの人権を否定する報道はもはや存在せず、LGBTを含む全ての人の人権が規範化されていることに対して、この記事分析から、マレーシアのLGBTの人権は軽視され、LGBTを肯定する動きには圧力が加かっていることがうかがえる。

最後に、まとめ・考察として、マレーシアのLGBTという視座から見てきた「国（政府）」・「イスラム

教」という2つのファクターに着目したい。現在、マレーシアの政治は聞く人全員が認めるほど腐敗しているのだが、いくら酷くても現在の首相の任期が終わるまでは容認されている。いわば首相の思い通りがまかり通るような状態で、ほぼ独裁政治なのだ。そんな中、メディアも国のコントロール下におかれ、政府を不利な立場に立たせるような報道をすることは許されない、つまりは情報操作が政府の都合によってなされてしまう関係性がメディアとの間に築かれている。そのような不安定な政治状態の中でも、東南アジアや世界で今後さらに飛躍していくと注目されているマレーシアは、1つの国として確立されたナショナルアイデンティティーをどうやって獲得し他の国との差別化を図りつつ発展していこうかと、奮起しているように見える。ここで、イスラム教が大きな役割を担っているのだ。マレーシア社会の根本にあるイスラム教の伝統的な教えや習慣・考え方を様々な点において頑なに守ることをベースとしながら、「1 (one) Malaysia」といったスローガンを掲げ1つの国として団結しようとしている(2017,Wiki Investment)。時がたつにつれ、科学技術の発展等と共に、コーランには載っていないことについてイスラム的にはどのような判断を下すべきか決定せねばならない場面が増え、いわばイスラム教のモダン化が起こり、その中でも、イスラムこそ正しいのだ、イスラムの教えに沿って行けば間違いないという意識が、多くの国民や国政の中に意識的にも無意識的にも大きな軸として存在しているのを感じる。これは、政府から押し付けられている節も強くあるが、それ以上に、マレーシアではもはや「イスラム教」自体がある種の権力として、国民の間で相互に知らず知らず機能してきているのではないだろうか。ミシェル・フーコーの「知と権力」で、「現代の新しい権力の捉え方として、権力は支配する者、されるものという古典的な二項図式ではなく、社会の基盤にある家族や会社、サークル等の小集団の中で生み出される力の関係が、全体を統括する権力関係の基礎となる」(1996,桜井)とあるように、イスラム教という宗教が、マレーシア社会の中で信念等という枠を超えて、大きな力として国民間で働き、それこそが現在のマレーシアにおける「全体を統括する権力」の役割を果たしていると考えられる。このように、支配的な政治と強力なイスラムという権力の存在がある中で、現在のマレーシアが反イスラム的特徴を多く持つLGBTにとって厳しい時代と環境になっていることは明白であり、マレーシアの今後のグローバルな発展において国内のLGBTの問題解決は1つの鍵となるだろう。

表1

	ポジティブ	ネガティブ	どちらとも言えない	計
Malay	7	3		10
World	29	22		51
計	36	25	12	73

2016年前期「LGBT」ヒット記事

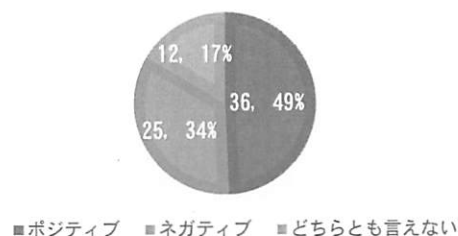


図1

◆ 参考文献

電通ダイバーシティ・ラボ,2015,『電通ダイバーシティ・ラボが「LGBT 調査 2015」を実施』  
<http://www.dentsu.co.jp/news/release/2015/0423-004032.html>

桜井哲夫,1996,『現代思想の冒険者たち 第 26 巻フーコー 一知と権力』 pp.260-261

Wiki Investment, 2017,『マレーシア』 <http://www.wiki-investment.com/country/bookContent/49/51/222/1057>